

(西暦) 2021年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

医療・福祉専門職の視点からみた生活支援における  
コミュニケーションロボットの役割と課題に関する質的研究

学位の種類: 修士 (作業療法学)

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 20896705

氏名: 清成 芙美

(指導教員名: 井上 薫)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 ページ (A4 版) 程度とする。

2021年11月現在、日本国内における65歳以上の高齢者の人口は29.1%に達している。それに伴い、介護従事者が不足することが予想されている。このような状況下において、経済産業省と厚生労働省は、自立支援による高齢者の生活の質の維持・向上と介護者の負担軽減の両方の実現を図るため、「コミュニケーションロボット技術の介護利用における重点分野」の2017年の改訂で、新たに介護業務支援等を追加するなど、ロボットの医療・福祉場面での活用を推進している。このような中で作業療法士は、介護現場の理解や課題(ニーズ)の分析などを行う役割を担うことが期待されている。

そこで本研究は、医療・福祉専門職の視点からみた生活支援におけるコミュニケーションロボットの役割と今後の課題を明らかにすることを目的に、作業療法士2名及び介護福祉士6名に個人インタビューを実施した。研究対象者の施設で多く使用されていたロボットは環境・操作反応型のPARO(株式会社知能システム)であったため、今回はPAROに関するデータの分析を行った。テーマティック・アナリシス法を用いて分析を行った結果、生活支援におけるロボットの役割について、作業療法士、介護福祉士に共通していた認識は、「職員の支援手段となること」であった。特に作業療法士は、「スタッフや動物の代用をする役割」という具体的な内容を挙げていたが、介護福祉士は「特別な役割は意識していない」との認識を抱いていた。両職種の見点の特徴を比較したところ、作業療法士の見点としては、「対象者の障害像を明確化していること」「使用目的を明確にしていること」「本人主体の生活へのアプローチを行なっていること」が考えられた。一方で介護福祉士の見点としては、「生活の場での活用」「対人交流の幅の広がりに着目している」ことが考えられた。したがって、作業療法士が作業療法評価に基づく対象者の状態に関する情報を介護福祉士に提供することで、生活の場でより有効な活用が可能となると考えられる。また、作業療法士、介護福祉士が認識しているロボットの課題の共通点は、「破損・故障に不安があること」「感染症リスクに関する不安」「感染症を配慮した環境設定が必要なこと」「職員の製品知識不足」であった。その他、作業療法士は「対象者の精査が必要なこと」を、一方で介護福祉士は「コミュニケーションを取るには製品として不足する要素がある」と認識していた。なお、十分な対象者評価、ロボットに関する製品知識の情報提供などにより解決できる点もあると考えられた。

以上より、ロボットの有効な活用のためには、両職種が専門性を生かし、それぞれの職種の弱点を補完し合うことで、より有効にロボットを使用できる可能性が示唆された。なお、今回の結果はPAROに関する認識に基づいて分析されたものであり、その他のロボットへの一般化はできない。今後は、対象ロボットの種類を増やし、ロボットの役割や課題を検討する必要がある。